



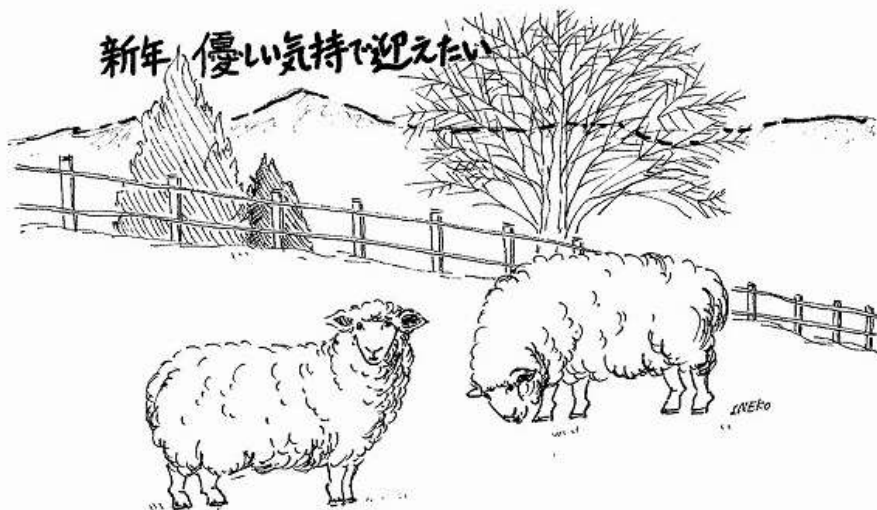
2015年1月15日発行（季刊）



# う 羽 化 か

ISSN1880-8646  
2015年1月  
第101号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 木 下 和 久



## 目 次

漢点字の散歩 (38) (岡田健嗣) .....	1
点字から識字までの距離 (95) (山内 薫) .....	8
東京漢点字例会報告とわたくしごと (木村多恵子) .....	13
東京漢点字学習会報告 (菅野良之) .....	19
漢文のページ .....	23
ご報告とご案内 .....	25
編集後記 (木下和久) .....	27

## 漢点字の散歩（三十八）

岡田 健嗣

### 万葉集初体験（三）



#### 日本語のリズムとそのバイアス

左は『萬葉集』巻一、四五番の柿本人麻呂作の長歌です。いつものように、下にその読みを記します。読者諸兄姉におかれましては、多少読み難いかとは存じますが、音読を試みていただけますよう、お願い申し上げます。

やすみしし 我が大君 高照らす 日の御子 神ながら  
神さびせすと 太敷かす 都を置きて こもりくの  
泊瀬の山は 真木立つ 荒き山道を 岩が根  
禁樹押しなべ 坂鳥の 朝越えまして 玉かぎる  
夕さり来れば み雪降る 安騎の大野に 旗すすき 小  
竹を押しなべ 草枕 旅宿りせず いにしへ思ひて  
（やすみししわがおほきみ たかてらす ひのみこ  
かむながら かむさびせすと ふとしかす みやこ  
をおきて こもりくのはつせのやまは まきたつ

あらきやまぢを いはがね さへきおしなべ さかと  
りの あさこえまして たまかぎる ゆふさりくれば  
みゆきふる あきのおほのに はたすすき しのを  
おしなべ くさまくら たびやどりせず いにしへお  
もひて）

ここでは、この歌の鑑賞について述べようというのではありません。またこの歌を選んだ理由も、まずは人麻呂の作であつて、歌番号がごく若い歌であることのみです。前後には人麻呂の歌は何首もありますので、それらの中から選出しても、全く異存ありません。ここで試みたいのは、誠に単純なこと、「人麻呂の長歌を音読」してみようということなのです。

私ども視覚障害者がこのような歌に触れるとき、果たしてどういう状態であるか、まずお話ししなければなりません。この歌に読みを添えましたのは、勿論これを助けに読んでいただきたいという意図があつてのことです。しかしそれに加えて、従来の点字でこれを読むとしますと、カナ文字の表記だけで表されたものを読まざるを得ないということを味わっていたかったですと思つてのことです。ぜひ試しにカナ文字だけの部分をお読み下さい。その従来のカナ点字の文で

は、ここではお示しできませんが、さらにいわゆる分  
かち書きという、一定のルールに従った特別の表記法  
が採用されます。「カナ文字だけでも分かち書きする  
だけで、文の理解が充分できるようになる」という考  
えのもとに採用された方法と言われます。とはいえこ  
のような表記法は、触読文字の文章を、一般の文字の  
表記法からさらに離れた表記としてしまいました。点  
字の使用者の、「読むこと」から何かを得ようとする  
興味を、削ぐ方向に働くものだったと、私は考えてお  
ります。

私は漢点字を習得した後、本会を立ち上げて漢点字  
の書物を作る活動を始めました。こうして会員の皆様  
のお力をお借りすることができるようになって、一つ  
の試みに挑戦してみました。一〇年余り以前のこと  
でした。それは、放送大学の国文系の講座を受講する  
ものでした。会員の皆様は快く、印刷教材を漢点字訳  
して下さり、この試みの一歩を無事踏み出すことができ  
ました。これは、私自身の力と漢点字の力を、この国  
文学の勉強で試してみたいという気持ちでさせたこと  
でした。

目論見は見事に当たって、漢点字を使用することが  
できる以前には思いもよらぬほどに、講義の内容を理

解することができました。それも当然で、それまでは  
現代文であれ古典であれ、漢字仮名交じり文をカナの  
分かち書きにして読んで「勉強」していたのですか  
ら、読んで理解せよという方が無理というもので、今  
思えば、理解できなくて当然というものです。それに  
反して今回は、漢字仮名交じり文をそのまま触読文字  
にしてテキストを読むことができたのですから、理解  
できなければいけません。予想していた通りとは申し  
ても、大変うれしい思いであつたことを覚えておりま  
す。

盲学校では、従来の点字の教科書で理解できなけれ  
ば、そのまま劣等生の評価が下されます。カナ点字だ  
けの文章でも、国文学を理解し味わうことができる  
というのが、盲学校の評価の基準だったからでした。そ  
うのが、盲学校の評価の基礎だったからでした。この  
盲学校の評価は、ついこの前の私にまで、何十年と  
いう間に渡って、重い軛となっていたのです。この  
試みに至るまで、私は古典に対して苦手意識のトラウ  
マに囚われ、読みと理解に関して、強いコンプレック  
スに苛まれていました。その重石がこの放送大学の受  
講を機に、フツと肩から外れたのです。それは大変  
心地よいものでした。

もう一つ、視覚障害者にとっての読書の手段として

普及しているのが、音訳された書物を聴読する方法です。これは音訳者が書物を読み上げて、生で、あるいはそれを録音して、読者が耳で聴くというものです。現在ではこのような方法も、「読む」と呼ばれていません。

しかしよく見極めなければいけないのは、音声は文字ではないということです。本来「読む」という行為は、文字を目で見て、それが情報として脳に送られ、そこで何らかの分析が行われた後に理解されるものと考えられます。その間、一度ならず幾度も目の前の文字を見直すことも珍しくありません。その場合、目は、決して受動的に働いているのではなく、一旦達した理解を再度その文字の上に転写し、さらに受容するという、極めて積極的に、能動的に働きかけていると考えられます。そのような行為を、「読みのフィードバック」と呼んでもよいのではないか、そう私は考えられています。

このようなフィードバックは、一般の文字にばかりに行われるものでないことは、先に述べました。視覚障害者は文字を読むに当たって、視覚を頼ることができません。そこで触覚という知覚器官にその機能を求めますが、従来の日本語の点字は、カナの体系、しか

もひらがなとカタカナの区別のない体系であることから、極めて不十分な文字と言わなければなりません。そこで故・川上泰一先生の考案になる漢点字を使用してみますと、ほぼ一般の文字に求められている機能に相当する機能を充分果たし得ることが証明されました。「読みのフィードバック」に、充分耐え得る文字の体系であることは、現在まで行ってきた全ての漢点字の活動が、証明してきました。

ただ惜しむらくは、視覚が果たし得る機能と触覚の果たし得る機能には、大きな相違があります。触覚に視覚の全ての機能の代替を求めることはできないのです。「読む」という行為は視覚のもので、それを触覚に代替させようとしますと、どうしても果たし得ないところが現れてまいります。その最も大きなものは、速度です。視読では、黙読しますと、薄い文庫本は数時間で読み終えると言われます。漢点字書の触読では、同じ規模の書物を触読するのに、数日かかってしまいます。音読を比較してみればさらにその相違が明らかになります。視読では、音読は余裕を持って行われるのが普通ですが、漢点字書の触読では、ほとんど不可能です。つかえつかえしながら読むしかありません。欧米の点字では、触読の便をはかるために、点字

の開発当初から「略字」と呼ばれる、アルファベットの綴りをグループ分けして一つの点字符号にして表す文字が考案されています。その略字体（グレードⅡ）で表された書物の規模は、アルファベットのフルスペリングで表されている文書と比較しますと、三〇パーセントも小さいものになります。また、綴りをグループ分けして点字符号一つにまとめることで、発音への変換が極めて容易になっていくのが特徴です。これによつて音読の速度が、私どものように母国語でない者にも、つかえずに声に出せる程度にまでに早めることに成功しています。

しかしこのことは欧米の言語に言えることで、日本語に当てはめることはできません。残念ながら漢点字仮名交じりの文書は、音読の速度を速めながら、しかも内容の読み取れる触読文字とはなり得ませんでした。速度を早めることは、どうしても断念せざるを得ませんでした。欧米の点字は音声記号であるアルファベットをさらに開発することによって実現しました。が、日本語の点字である漢点字仮名交じり文は、意味を表す文字を点字符号化したものですので、欧米の点字のような略字の体系を実現するとすれば、恐らく速記法の開発を試みるほかないでしょう。そうであるな

らば、漢字仮名交じり文を点字に実現しようという、川上先生の掲げられた目標から、さらに遠離ることになるに違いありません。従つて漢点字仮名交じり文では、その意味・内容を読み取ること以上を求めないとしなければならぬと、私は考えます。

その二つ目は体力です。触覚は直ぐに疲労してしまいます。通常視読されているものと同量の資料を触読で読了することを求められると、その達成は極めて至難です。たとい漢点字の資料が揃つていたとしても、それを全て読みこなすことは、容易ではありません。一般に「読む」ということは、質と量とが求められます。両者ともに果たし得なければ、読んだとは認められません。たとえば普通の大学生が卒業論文を書くに当たつて、一〇〇冊の本を読まなければならぬとしますと、視覚障害者の学生にもそれが求められて、達成しなければなりません。果たして可能でしょうか？一般に求められているものを視覚障害者にも同様に求めるのは当然ではありませんし、それを果たすべく努力するのも当然と考えます。しかしそれならば、触読の可能性と困難さについて、もっと検討されてしかるべきと私には思われてなりません。

昭和三〇年代後半から、わが国では磁気テープを利

用した音源を使った、録音図書の製作が始まりました。それに先だつて欧米では「ムーン」と呼ばれる音源を使用して、音訳書の製作が進められていました。ムーンとは、一九六〇年代に安価なアナログの音源として普及していた、ソノシートと呼ばれるレコード盤の呼称です。音訳書を聴読するための音源ですので、音の質は問われません。むしろ一枚の盤に如何に多量に録音できるかが求められて、一般のレコード盤より少ない回転数で録音されていたことを覚えています。わが国ではソノシートの時期を経ぬまま、磁気テープから音訳書の時代が始まりました。

現在ではアナログの磁気テープも既に使用されなくなりつつあります。今日、メディアとしてはデジタルのCDが使用されておりますが、これとて既に一般では使用されなくなりつつありますので、遠い将来でない時期には、次のメディアが模索されることになりそうです。

音訳書の聴読の大きな特徴は、先にも述べましたように、文字を介さない読書だということです。文字の仲介なしの読書（？）、これを読書と呼ぶなら、読書という概念が大幅に変わらなければならぬはずですが、残念ながらこの点も、ほとんど検討されずに済まされております。そこで既に以前にも試みたことす

が、読者の立場から、音訳書の特徴と、あるべき姿、あるいは音訳書に何が求められているかを、考えてみたいと思います。

視覚障害者が音訳書を聴読するということは、触読文字を触読することでは果たし得ないこと、如何に大量の書物を、如何に短時間に通読できるかを実現するのに適した手段として採用された方法と言えます。先に「音訳書を聴読することを読書と呼べるか？」という問いを提示してみました。しかしより大量の資料を、より迅速に、より容易に読むという目的の下には、疑問ともされないまま過ごされてしまったのでした。

点字を触読するという場合、これは目で文字を見て読むのと、さほど代わらないプロセスを踏みます。漢字仮名交じり文の点字を触読する場合のプロセスは、指先で触れて文字を追うと、触知された情報は求心性の知覚神経を通して脊髄から大脳へ達して、そこで文字としての認識、次いで文章の要素という認識と判断の後、一つの文章に結晶して理解されます。勿論そのプロセスには、視読と同様のフィードバックも行われて、積極的な、能動的な「読み」が実現されます。視読と異なるのは、触覚の情報量が極めて乏しく、そのために読みの速度が極めて緩慢なことです。また、触

覚は大変疲労し易く、短時間に触知に耐えられなくなることです。

音訳書を聴読して理解するというプロセスは、文字を視読あるいは触読するのとは異なった事態を予想させます。少し考えてみましょう。

まずは文章の構築です。文字を読む場合は、その文字を読み取り、理解し、文字と文字とを接合し、最後に文章を組み立てます。しかし聴読では、既に音訳者がそのプロセスを代行して、音声化して下さっています。音訳者の脳で理解され、構築され、音声化された文章を耳で聴き、理解するのが聴読の主なプロセスと言えます。つまり聴読者の文章の構築への関与は、極めて小規模にしか許されないのです。

フィードバックは全く行われないかと言えぼそんなことはありません。しかし文字を相手にするときとは異なり、強力に意識を集中して、意識の力でフィードバックを実現しなければなりません。このことは、文字を客体とした読書にはないプロセスと言えます。本来の意味のフィードバックとは異なるのかもしれない。そしてかなり困難な道程ですし、かなり徒労を覚悟しなければならぬプロセスとも言えそうです。

しかし音訳書は、触読に比べて大量の情報をもたらしてくれまし、優秀な音訳者の音訳は、過不足のない情報と分析をもたらして下さいます。聴読者の側に、文字の知識と大量の情報の蓄積があれば、漢点字書の触読だけでは叶わない、量的な読書を担ってくれるに違いありません。

さて冒頭の人麻呂の長歌について考えてみます。私は盲学校で学んで社会へ出しましたが、ずっと古典には苦手意識を抱き続けていました。その理由は、カナ点字のみの従来の点字では読み取れませんでした。この、音訳書でも、この長歌のような歌は、全く理解の外だったことにあります。

ところが放送大学の古典文学の講座を受講しますと、ひどく驚かされたことがございました。勿論テキストは漢点字で読めるように会員の皆様が計らって下さいました。大学の講義も、放送を録音して、何度か聴講しました。

放送教材では教授の講義とアシスタントの朗読が進められます。この講座のアシスタントを務めておられたのが、もとNHKのアナウンサーであった加賀美幸子さんでした。そこで万葉集のある長歌が朗読されたのですが、それまで私が聴いていたものとは全く違った朗読だったことに身体が動かなくなりました。文字の読みが違うとか、アクセントが違うとかいうのではありません。

加賀美さんの朗読は、実にシンプルに、書かれています通りに読んでおられたのでした。そこで私は何に驚いたかと申しますと、長歌の音韻の構成が、「五・七、五・七、…五・七・七」であること、加賀美さんは、正しくその通りに読んでおられること、そしてその長歌の内容が、万葉の言葉でありながら、水が流れるように、私の耳から身体へと、そのまま流れ込んでくるように感じられたことでした。その朗読が、そのまま私の中に染み入ってきたのでした。実に不思議な感覚を味わいました。

そういう体験の後、音訳書の中から古典を選び出して、長歌の音訳を聴くようにしました。そこでおや！と思わされました。加賀美さんの朗読とはどこか違う、そうだ、リズムが逆だ、ほとんどの音訳者が、「五、七・五、七・五、…七・五、七・七」のリズムで読んでいたのです。

その後私は、盲学校在学中から現在に至るまで、このようなリズムに関して、誰か何か言っていないか、思い出そうとしてみましたが、残念ながら思い当たりにませんでした。この時点ではつきりしたことは、私は古典が苦手なのではなく、難しくて分からないのでもなく、正しく教えてもらえなかったのだということに気づかされたということでした。その後は全て、

私の納得の行くような理解に至るまで、常に白紙に戻ることを繰り返すことを厭わないことにして、事に当たることにしようと考えるようにしました。このリズムがどこからきて、現在どのよう存続しているのか、これは私にとつて興味の失せない課題と言つても過言ではありません。

最後にもう一首、八〇三番、山上憶良の「嘉摩三部作」の第三群をご紹介します、拙稿の結びとさせていただきます。この歌は、憶良が「情苦・愛苦・老苦」の最後の「老苦」を歌つたものと言われます。ご精読下さい。

世の中の	すべなきものは	年月は	流るるごとし
とり続き	追ひ来るものは	百種に	迫め寄り来る
娘子らが	娘子さびすと	韓玉を	手本に巻かし
よち子らと	手たづさはりて	遊びけむ	時の盛りを
留みかね	過しやりつれ	蝮の腸	か黒き髪に
つの間か	霜の降りけむ	紅の	面の上に
か 皺が来りし	ますらをの	男さびすと	剣大刀
腰に取り佩き	さつ弓を	手握り持ちて	赤駒に
文鞍うち置き	這ひ乗りて	遊び歩きし	世の中や
常にありける	娘子らが	さ寝す板戸を	押し開き
い辿り寄りて	真玉手の	玉手さし交へ	さ寝し夜の



いくだもあらねば 手束杖 腰にたがねて か行けば 人に厭はえ かく行けば 人に憎まえ 老よし男は かくのみならし たまきはる 命惜しけど 為むすべもなし

(よのなかの すべなきものは としつきは ながるごとし とりつつき おひくるものは ももくさに せめよりきたる をとめらが をとめさびすと からたまを たもとにまかし よちこらと てたづさはりて あそびけむ ときのさかりを とどみかね すぐしやりつれ みなのおた かぐろきかみに 一つのまか しのふりけむ くれなゐの おもてのうへに いづくゆか しわがきたりし ますらをの をとこさびすと つるぎたち こしにとりはき さつゆみを たにぎりもちて あかごまに しつくらうちおきはひのりて あそびあるきし よのなかや つねにありける をとめらが さなすいたとを おしひらき いたどりよりて またまでの たまでさしかへさ ねしよの いくだもあらねば たつかづゑ こしにたがねて かゆけば ひとにいとほえ かくゆけば ひとにくまえ およしをは かくのみならし たまきはる いのちをしけど せむすべもなし)

(以下次号)

## 点字から識字までの距離(九五)

野馬追文庫(南相馬への支援)(十三)

墨田区立ひきふね図書館 山内 薫

### 南相馬へ(五) 「かのん」訪問

二〇一三年も押し詰まった一二月二六日と二七日、ゆめ基金のイベントで、Kさんと絵本作家のTさん、そして翻訳家のNさんの三人が、南相馬の障害児通所施設「じゅにあさぽーと」『かのん』へ行き支援を行った。Kさんがその報告を寄せて下さった。併せて同行した翻訳家のNさんの〈あしたの本〉への報告と「かのん」の所長NさんからのKさん宛のメールもご紹介する。

#### 〈Nさんの報告〉

一昨日・昨日と南相馬に行ってきました。

夜中に雨が降りましたが、日中は良いお天気でした。福島から峠を超えるまでの川俣から飯館のあたりは雪が結構積もっていて、峠から先は雪がありませんでした。

夏に行ったとき、飯館などの畑にも想像よりも作物が植えられていました(試験栽培とも伺いました)

が)、今回は工事があちこちでされてる様子と、人が戻ってない家は、朽ち果て始めている様子が印象的でした。

クリスマスの気配も年末の気配もバスが通った周囲にはありませんでしたが、南相馬市内に入ったら、イルミネーションがきれいについていたり、お飾りなども見られました。

南相馬では、昨年山内さんと仮設をお邪魔したときにお世話になった社協のS生活相談員が迎えてくれました。昨年一緒に訪ねた視覚障害の女性は今もお元気で読書が相変わらずとても生きがいになっているという嬉しいお話をしてくださいました。

もうひとり、Wさんを彷彿とさせる？どこに住んでいるのか不明なエロ話がちよつと好きな愉快なボランティアのおじさんと三人で、大木戸大鹿仮設、(ここは一番新しい仮設ですが、あまりお子さんは住んでないとか)のサロンに。今日はクリスマスパーティーでクレープを焼くとか。

スタッフに女手はいないなど張り切って手伝おうとしたら、(クレープなんて洒落たものは私には焼けません)、自立支援ですから、見守ってくださいと、Sさんに囁かれました。

どんどん住民が集まり、ワイワイおしゃべりと笑い

声、みなさんが元気になっているのが分かりました。相馬流れ節の見事な喉も披露され、私は、野馬追文庫でもお送りした紙芝居『かさじぞう』を読ませていただきます。皆さんじつと聞いてくださいました。

ただし、この仮設は出来て一年です。紙芝居が一冊もありませんでした。多分そうだろうと、紙芝居は図書館から借りて持って行きました。本は私たちの野馬追の寄贈本が一番多かったですが、そのほかに伊勢崎良い本を送る会というようなシールが貼つてある本と、シールなどは特に貼つてない普通の寄贈本が本棚に並んでいました。

みなさんの明るさは、諦めてしまった落ち着きでもあるのだと思いました。もう前のようにいつ帰れるのかとか、早く帰りたいとかでなく、もう帰れないだろうと……

だからここに居る人たちと、仲良く生きていくんだというような、そんな雰囲気でした。

一人とても張り切つてリーダー格で動いていた女性は、私が一番若いから……と一生懸命みなさんを盛り上げて雰囲気を作つておられました。どんなできごとを通り抜けた方なのかわかりませんが、今のその姿にちよつと涙が出ました。

皆さんボランティアにはとても暖かくて、小高の泥

だらけでめちやくちやな家を何日もボランテイアさんが片付けてくれた、自分たちではとてもできないことだったと、でもそれでもやはりその家にはもう住めな  
いだろうと……、でもありがたくてありがたくてと、  
何度も私に頭を下げておられたおばあさん。

国がやるべきことを、こんなにありがたがってお礼を言わねばならないって、なんだろう……。

そのあとは「かのん」によって、スタッフの皆さんとあすの打ち合わせや、準備をしました。

ホテルに行くと絵本作家のTさんと、翻訳家のNさんも到着していて、三人で最後の打ち合わせ。

特に、Tさんのキラキラバッチのワークは、下ごしらえの手間が半端ではなく、ほんとに、どんなに準備が大変だったろうと、頭が下がりました。前の晩は、絵本の仕事で完徹だったとか……

お二人ともやはり障害のある子どもたちが、どれだけお話などに集中してくれるのかとても不安だったようでした。

となりのホテルで忘年会のあるOさんが、私たちのホテルにかけつけてくれました。

震災直後は車が一台もすれ違わず一〇分もかからな  
いで来れた道路が、今日は二五分もかかっちゃった  
と、いいながら……。相変わらず素敵なOさん 南相馬

の放射線量はとても下がっていると力説。そのために日々奮闘しているんだものね、地域保健のために働いている保健師Oさん。

次の日は、早くから子どもたちが来てくれました。いろいろな子どもたち。障害の重い子どもたちは相馬養護の子どもたち。肢体不自由のある子どもたちは、原発で登校できなくなった富岡養護からの転校生も。震災直後、心理士会でこの子どもたちの避難所や仮設の生活の困難さが話題になっていましたので、元気な姿が見れて嬉しかった。知的には高い発達障害の子どもたちは、うしろのほうにづるんでかたまつてすわってこっそりカードゲームしてたり……。でも、みな一生懸命こちらの問いかけに向き合って答えてくれて、お話の世界を楽しんでくれていました。総勢五〇人くらいの方が集まってくださいました。朝日新聞の取材がありました。

そして、高知こどもの図書館からはたくさんお心のこもった折り紙が届いていましたので、会のはじめにご紹介し、お土産に持って帰ってもらいました。飾りのような作品は、かので使ってもらうためにお渡ししました。

チューリップ文庫のZさんにチラシをお送りした  
ので、駆けつけてくれました。お仲間の他の文庫の方も

一緒に。中央図書館の読み聞かせのボランティアさんたちです。仮設でのおはなし会は、まだされてないとか。日常の文庫や図書館のおはなし会は頑張っておられるようでした。いつか野馬追文庫と連携して何かできるといいですねとZさんとお話してきました。

社協のSさんが南相馬の中に出来た別の自治体の仮設、浪江町の方たちが住んでいる仮設を車で通ってくれました。管轄が違うので、全く中のことは分からないと……。日本って、なんでも線を引くと、きつぱり分かれてしまう国なんですよ。そして仮設に住んでいる人たちというのをみなさんは震災の被害者で皆いい人たちと思っているかもしれないけれど、そうでないような反社会的な人たちもたくさんいるんだと、ポツリと生活相談員としてもご苦労のお話も。

かのんのNさんも、仮設に住んでいると支援で生活ができるために、それでそこにとどまる人たちももちろん多くなくなっていると言うような話も。南相馬に少しづつ若い人も戻ってきてはいるが、やはり人口比は昨年寄りと障害児者が多くとどまっているのではと書いておられました。支援の必要度がとても高い人口比だと。

私たちは震災後の人のいなくなった南相馬と比べて今はくくとみますが、南相馬の人たちは震災前の南相

馬を知っているもので、やはり今の南相馬を寂しく悔しく、元気になつたなんてとても思えないようでした。でも頑張っているのは南相馬の人たち自身。自分たちの生活のために立ち上がっている。その姿がくつきりとみえました。それがこの一年の私の一番の実感でもありました。南相馬の人たちの立ち上がり。かのんもまさにそういう場の一つ。長くなりましたが、今後の野馬追文庫の選書の参考にしてください。

どうぞ皆さん良いお年を。  
そして来年もよろしく。 K

〈翻訳家Nさんの〈あしたの本〉への報告〉

一月二十六日。福島駅から、雪に覆われた川俣町、人気のない飯館村を経由して、五時三〇分ごろ南相馬に到着しました。通常はガラガラのバスが、なんと満席！きつと、年末のせいでしょう。街道には行きかう車も多く、簡素なイルミネーションに彩られた南相馬の街は、昨冬より活気がありました。

じゅにあさぼーと「かのん」は、きつずさぼーと「かのん」の分室として、今年八月に新しく開園した施設です。放課後や学校が休みの期間に利用され、日ごろから音読を通して、子どもたちに感情を読み取るすべを伝え、表現を育てています。ここには、A D

HD・アスペルガー症候群のお子さんが多く、所長のNさんによれば、「対人関係を構築するスキルを学ぶための事業所」だそうです。子どもたちに対するのと同じくらい、保護者への働きかけを大切にしている、「悩みながら子育てするお母さんたちの、〃駆け込み寺〃みたいなところ」だと聞きました。一月二七日一〇時、いよいよイベントが始まります。三五名ほどの、幼児から中学生までの子どもと保護者をまえに、Kさんが「へあしたの本」プロジェクト」の内容を説明したあと、Tさんと私を、「みほちゃん先生」「えっちゃん先生」として紹介してくれました！

私が紙芝居を三本演じたあと、Tさんが『オムライズ、ヘイ！』と『ありんこぐんだん、わはははははは』を読み聞かせ、その後、事前に何日もかけて用意した材料を広げて、「キラキラバッジ」の作り方を伝えました。がんこちゃんの絵を選ぶ子もあれば、ステンドグラスみたいなバッジを完成させる子も。大人気のTさんに一目会いたいと、地元の読み聞かせグループの方たちも駆けつけました。一時間半のプログラムあいまい間に、Kさんがいい具合に手遊びを入れて、子どもたちの緊張を解きほぐしました。

障害のある子どもたちと聞いて、「この紙芝居ではむずかしすぎるかも」、「バッジ作りを理解してもら

るだろうか」と事前に気を揉んでいたのが、嘘のようです。紙芝居を演じながら「さあ、なんだろう」と呼びかければ、「ロボット！」と元気よく答え、会場と私たちの橋渡ししてくれた男の子が、実はコミュニケーション障害を持つ子だと、後から聞いて、びっくり。Nさんはこう言っています。「今日は、よっぽど嬉しかったんでしょうね。私たちも相当がんばっていますが、単調な日々なので、こうして外から人が来てくれることがほんとに嬉しいんです」とも。

最後は、全員すてきなキラキラバッジをつけて、大満足の記念撮影です。

帰りは、Nさんの運転で、仮設住宅をいくつかまわり、津波が押し寄せた海岸線も見せてもらいました。復興住宅の建設が遅れて、仮設住宅（野馬追文庫で毎月本を届けている三六箇所）はなかなか減りません。ほかにも東電の補償額の差が、子どもたちの関係にもひびを入れてしまうなど、心が痛む話もたくさん聞きました。なお当日は、朝日新聞南相馬市局長のH氏の取材もありました。N

へ「かのん」の所長NさんからKさんに届いた

メール）

（あしたの本）K様

優しいお心づかい大変ありがとうございます。正

直、皆様との出会いからまだ興奮が冷めない状態であります。とつても素敵な時間をありがとうございしました。今回、年末年始休暇・初めての九連休を頂きました。本を読んだり・推理ドラマを見たり、旅行したりとあつという間の九日間でしたが、今までになく何とも充実した毎日を送ることが出来ました。

考えてみれば、この…2年間ただがむしやらに…突っ張って…精神的な余裕を持つことなどあえて拒否し、避けながら…ただ、ただ必死に生きてきたような…。今回、全く気持ちに余裕がないのに、余裕があるふりをし、人に優しくしないのに優しいふりをしてきた偽善的な自分を、少しではありますが客観的に見つめ直すことが出来たような気がします。

「時」は心を優しく変え、「絵本」は、人の心を豊かにし、「言葉」は、コミュニケーション能力を向上させる…素敵なツールだと思います。

今年は、自分も子どもたちに恥ずかしくない大人に成長できるように、この素敵なツールを生かさせて頂きながら、心新たに頑張っていきたいと思えます。K様たちとの「出会い・絆」をこれからも大切にさせて頂きたい。遠くて大変でしょうが、また、遊びに来てくださいね。

かのん N

## 「東京漢字羽化の会」第107～109回

### 例会報告とわたくしごと

木村 多恵子



2014年10月の例会（第107回）10月8日（水）

13…30～15…30、場所、港区ヒューマンプラザ

7階竹芝小ホール

9月一杯で 朝日の記事、磯田道史の「備える歴史学」は終了し、10月から4人が1週交替で

「商魂の歴史学」（山室恭子）

「交流の歴史学」（呉座勇一）

「デザイン最前線」（佐藤可士和）

「食事の歴史学」（原田信男）が執筆することになった。新しいものがどんな内容なのか分からないが、少しこのまま追ってゆくことにし、そのためのグループの組み分けを決めた。

横浜の点字印刷には、11月19日に、IさんとSさんが行ってくださることになった。Iさん、Sさんよろしくお願いいたします。

来年も岡田さんが、奇数月の第3水曜日に、横浜の印刷室の予約をしてくださることになった。

会員を募るためのちらしをNさんに印刷していただいた。皆で、それぞれのお近くの、これは、と思える施設にちらしを置かせていただくことにした。

墨田区内の各図書館には既にちらしを置かせていたのだ。

11月の例会のとき、横浜のYさんが、「萬葉集釋注」の校正について説明に来られるが、横浜には新会員が増えたので、校正の量は減るかも知れませんがよろしく願いますと岡田さんが話された。

「文字について」何時ものように岡田さんが詳細に話された。

12月の日程を打ち合わせた。

2014年11月の例会(第107回) 11月12日(水)

13・30〜15 ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

『萬葉集釋注』の校正の説明に横浜からYさんがいらしてくださった。

東京の皆様どうぞよろしく願います。

朝日の新しい内容は、4種類の話題に分かれているので全体のファイル名を試みに『朝日「be on Saturday」1410』としてまとめたが、11月のものからは『朝日「歴史学」1411』のように変えることにした。ただ、全体の表紙に付けるタイト

ルは、『朝日「be on Saturday」1411』とすることにした。

ヒューマンプラザのロッカーの鍵について、各団体に鍵を1本作ってくださいるが、鍵の管理は加盟グループが責任を持つか、プラザ側に預けるか、どちらかを選べるというので、羽化では、事務所に預けることにした。ただ、学習会ときは夜間なので、鍵を夜間に管理している事務所に移していただけるようお願いすることにした。

新しい会員から漢字入力方法について、実践に即したやり方を直接教えて欲しい、との希望が出たので、12月10日の例会の日に、例会の前の時間、13・00から、14・30と、14・30〜16・30の例会と、適度な時間を割り当てて入力方法について、岡田さんに説明をしていただくことに決めた。

11月19日にお二人の方が横浜へ点字印刷に行ってください。ありがとうございました。

11月22日の学習会は、学習者がお休みなので、この日は休みにした。

2014年12月の例会

(東京羽化結成10年目に入る。通算109回目)

12月10日(水) 13・00〜16・30

ヒューマンプラザ7階第2会議室

例会に参加して下さった方は、全員例会の前の「ミニ講習会」にも参加して下さった。パソコンへの漢字入力の実践について、岡田さんが説明をした。特に括弧のいろいろな種類の使い分け、ハイフン、長音、マイナスの微妙な違いなどについて丁寧に説明した。

ミニ講習会と例会とは、ほんの少しの休憩だけで、例会に入った。

例会では、「歴史学」の入力グループの組み分けをすることからはじめた。

『萬葉集釈注』は順調に進んでいると、岡田さんが報告した。

ボランティア室のロッカーの鍵については、事務所との打ち合わせ通りに決まった。ロッカーの鍵は事務所に預ける。

岡田さんから、少し急ぎの資料入力依頼があったので、早速3人が受けてくださった。

2015年1月21日に横浜へ印刷に、IさんとSさんが行ってくださることになった。Iさん、Sさんよろしく願いました。

1月25日の横浜での「羽化新年会」に、東京から6人参加することになった。

会員募集のチラシについて話し合った。

2015年2月と3月の日程について相談した。岡田さんが漢字の成り立ちについて丁寧に説明してくださいました。

#### \* 予告

2015年1月の例会（第110回） 1月7日（水）  
13…30～15…30

2015年1月の学習会（第85回）  
ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

1月17日（土）18…30～20…30

2015年2月の例会（第111回） 2月18日（水）  
ヒューマンプラザ7階第2会議室

13…30～15…30

2015年2月の学習会（第86回）  
ヒューマンプラザ7階第2会議室

2月21日（土）18…30～20…30

2015年3月の例会（第112回） 3月11日（水）  
ヒューマンプラザ7階第2会議室

13…30～15…30

2015年3月の学習会（第87回）  
ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

3月28日（土）18…30～20…30

ヒューマンプラザ7階第2会議室



## わたくしごと

わたしが少女だったころ、発端はどこからはじまったのか分らないけれど、お花や星に纏わる伝説が小説やものがたり、歌、そしてブローチなどで、いろいろな形で、はやっていた。わたしにとつては英語の教科書にあったギリシア・ローマ神話の「アポロンとヒュアキントス」の物語からはじまる。

(引用1) アポロンは美少年ヒュアキントスを大変かわいがり、彼の行きたがる場所なら、山でも川でもいつでもついて行って世話をし、一緒に遊んでいた。

ある日、鉄の輪投げ遊びをしていたとき、アポロンが投げた鉄の輪が、地面に落ち、それが跳ね返ってヒュアキントスの額に当たってしまった。ヒュアキントスは気絶した。慌ててアポロンは彼を腕に抱え、手を尽くしたが、ヒュアキントスは死んでいった。音楽の神であるアポロンは、「わたしの堅琴と歌で、お前を讃え、お前の運命を語ろう。そしてお前はわたしの悲しみを表す花になるであらう。」

と言っているあいだに、ヒュアキントスの血の滴りが草を染め、紫貝で染めたデュロス染めよりも美しい

紫色の一輪のヒヤシンスの花になった。アポロンはその花びらに、「A I A I」と書き付けた。それはギリシア語で「悲しい 悲しい」という意味である。ある学者によれば、この花はヒヤシンスではなく、アイリスあるいはひえん草(そう)、またはパンジーだろうともいう。(引用終わり)

この物語の他に、「エコーとナルキッソス(スイセン)」の物語や、アンデルセンのけなげな『ひなぎく』の話、星座「カシオペア」の物語、宮沢賢治の『よだかの星』なども友人たちとのあいだで話題になった。

中でも今なお心に残るものは、スイスに伝わる話である。

(引用2) わすれなぐさ (スイス)

ある小さな村にとても仲の良い男の子と女の子がいた。二人はどこへ行くにも一緒に、ある日彼らは山へ遊びに行った。ゴウゴウと流れる川のほとりに着いたとき、女の子はかわいらしい花を見つけて、

「ねえ、見て、とってもきれいなお花が咲いてる」

「あ、本当だ」

男の子は、そのきれいな青い花を女の子にプレゼン

トしたくなり、

「ちよつと待つてて」

と言つて、服が汚れるのもかまわず、男の子は花を取りに、川べりを下つて行つた。

ところが、花に手が触れたとき、足が滑つてしまつた。男の子はとつさに、摘み取つた花を女の子の元へとほおり投げた。

「君のこと、ずつとずうつと大好きだよ。どうかほくのことを忘れないで」

川に流されていく男の子の声が、激しい水音の中で遠ざかつてゆき、とうとう見えなくなつてしまつた。

女の子は泣きながら、もらつたばかりの青い花をそおつと胸に抱いて、

「わたし、ずうつとずうつと忘れない」と言つた。

それ以来この花を「わすれなぐさ」と呼ぶようになったという。(引用終わり)

クラスのひとりが言つた。

「ぼくはその花を女の子にあげられたらそれでいい。その子が、その後幸せに暮らせればなおいいけれど、ぼくは、花を受け取つてもらえただけで、この少年のようにおぼれ死んでもいい」

わたしは衝撃を受けて、ただ黙つていた。するとひとりの少女が言つた。「それは自己満足じゃないの？」

少し考えてから彼は言つた。「そうかも知れない。けれども、ぼくはそれでいい。だって、その時にできる最高のことをしたのだから」

少女たちは納得しきれない憤懣を浴びせかけた。

「何でそんなことで満足できるの？」

「もつとほかにも方法はあるでしょ？」「なんという意気地のないことを言うの？」

「だって、言葉にはならないけれど、女の子はその花を欲しかつたんだよ」

「花なら他にもあるさ」とか、「たった一輪の花と自分の命と取り替えられるか？」などと混ぜつ返す男の子もいて、総攻撃を受けた彼は、だんだん黙つてしまつた。そして次の授業は体育だったので、この話題はそれきりになつた。

けれども、「そのときに人のためにしてあげられる最高のことをする」といつた彼の言葉は、わたしの胸に重く響き続けた。わたしならお花などいらぬ。それより一緒に生きて行きたいと単純に考えていたのだ。

(引用3) 詩 わすれなぐさ

ウイルヘルム・アレント 作

上田 敏 訳

ながれのきしのひともとは、  
みそらのいるのみづあさぎ、  
なみ、ことごとく、くちづけし、  
はた、ことごとく、わすれゆく

(引用 終わり)

あれから50年を経て、学齢以前からの友が、スイスに伝わる伝説に寄せて、ドイツのウイルヘルム・アレントが詠んだ、この美しく切ない詩を教えてください。

「(波、ことごとく、くちづけし、)、…ねえ」とため息混じりにわたしはささやいた。

すると彼女が、さらに小声で言った。

「はた、ことごとく、忘れゆく」

そして、二人は同時に「(しかも、もとの水にあらず) (方丈記)」と言った。

そして、あまりの儂さに、二人は長い沈黙に落ちてしまった。

わたしは、この「波、ことごとく、口づけし」の一行は、激しい川水が飲み込んでしまった少年を、次第

に穏やかな流れに変わったすべての波が、慰めの弔いと、やさしい別れのあいさつを、少年に送っているように思えた。抗いがたい大自然は、絶えず新たなものと和合してゆく。

多分友も、同じような連想をしたのだと思う。そうでなければ、「しかも、もとの水にあらず」と一緒に口をつけて出はしなかつただろう。

この友も、わたしの彼も、一輪の花を残して逝ってしまった。

#### \* 参考

(1) トマス・ブルフィンチ作、野上八重子訳、『ギリシア・ローマ神話』

(2) 内田伸子(うちだ・のぶこ) 監修

ナツメ社 子供ブックス 「母と子の読み聞かせ 世界のお話120」(ママ お話聞きたいな)

文 高木栄利(たかぎ・えり)、挿絵 小谷智子  
(こたに・ともこ)

(3) 詩 『わすれなぐさ』、ウイルヘルム・アレント、上田敏 訳、岩波文庫、1994年出版、『海潮音』

2014年11月15日 土曜

# 東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

## 平成26年度 第6回(第82回) 報告

- 1 日時 平成26年9月20日(土)  
18時10分～20時20分
  - 2 場所 ヒューマンプラザ7階 第2会議室
  - 3 出席者(省略)
  - 4 周知事項  
・学習会予定 10月18日(土) 18時30分  
・12月の学習会後に忘年会予定  
(学習会の開始時間を早める) 参加者歓迎
  - 5 学習会内容  
使用教材 漢点字 講習用 テキスト  
初級編第6回
  - 8 複合文字(4)  
2. 紹介し落とした文字、および基本文字にない  
象形文字・会意文字二十二字
- ア 前回の復習
- ※「官」とそれをパーツとして含む文字3つ。

(32) 「追」 しんによう(1・2・3の点)と、しんにく(1・5の点)で表す。

※「貴」(ヲ・3・5の点とキ・1・2・6の点)とそれをパーツに含む文字一つ。

(33) 「貴」 貝(3・5の点)とキ(1・2・6の点)で表す。貝は子安貝のこと。タカラガイ科の巻貝の俗称。卵型で表面は平滑、光沢に富み、色彩斑紋が美しい。古代中国では貨幣として使用。「財」「資」など経済に関する語に含まれる。

(34) 「遺」 しんによう(1・2・3の点)と貴(1・2・6の点)で表す。

イ 今回の学習

### イ 今回の学習

(35) 「求」 十(2・4・5の点)と水(1・2・3の点)で表す。分類としては基本文字に属する。音読みのキュウは漢音、ク・グは呉音。

テキスト以外の熟語には「求心(末端から中心に近づく・求心性神経。遠心は中心から末端に向かう・遠心性神経)」「求刑」「求道(グドウ、キュウドウ)」「求食(クジキ)」「求知心」「哀求(同情心に訴え頼む)」「要求」「希求(キキュウ、ケク・願い求める)」「欣求(ゴング・喜び求める)」「勤求(ゴン

グ・勤めて仏の教えを求める) “ 訴求 “ 誅求 (チ  
ユウキユウ・厳しく求めて求める) “ など。

※ 「去」 (1・3・4・5の点と2・  
4・6) “ とそれをパーツに含む文字1つ。

(36) 「去」 (1・3・4・5の点)

とコ (2・4・6の点) で表す。基本文字に属す  
る。音読みのキヨは漢音、コは呉音。テキスト以外の  
熟語には “ 去勢 “ “ 去来今 (キヨライコン・過去と未  
来と現在) “ “ 則天去私 (夏目漱石の晩年のことば。

小さな私を捨て自然に委ねる) “ “ 去年草 (こぞくさ  
・麦。二年草) “ “ 消去 “ “ 脱去 (抜け出る) “ “ 散  
去 (散り散りになる。間を離す) “ “ 去去日 (キヨキ  
ヨジツ・一昨日) “ “ 去去年 (おとし) “ “ 帰去来

(キキヨライ。かえりなんいぎ・故郷に帰るために現  
在地を離れる) “ “ 去られん坊 (夫に去られた妻。離  
縁された妻) “ “ 姑去り (姑ざり・姑の意見で嫁を離  
縁する) “ “ 風と共に去りぬ “ “ 片去る (かたさる・

脇へ寄る。遠慮する) “ “ 片時去らず (少しの間も止  
めない) “ “ 消え去る “ “ 捨て去る “ など。

(37) 「法」 (1・2・3の  
点) と去 (2・4・6の点) で表す。音読みのホ  
ウは漢・呉音。テキスト以外の熟語には “ 法衣 (ホウ

エとも・僧侶の衣服) “ “ 法位 (僧侶の位) “ “ 法威  
(仏法の威力) “ “ 法要 “ “ 法外 “ “ 法螺 (ホウ) “ “  
“ 法皇・法王 “ “ 説法 “ “ 手法 “ “ 技法 “ “ 調法 “ “  
“ 違法 “ “ 脱法 “ “ 悪法 “ “ 二進・十進・十二進・十  
六進法 “ “ 作法 “ “ 魔法 “ “ 正攻法 “ “ 生兵法 “ “ 筆  
法 “ “ 正法眼蔵 (シヨウボウゲンゾウ・悟りの真髄。  
「眼」は眼目、「蔵」は真理) “ “ “ 荒法師 “ “ 療法  
(心理・精神・衝撃・紫外線・指圧・作業・睡眠・大  
気・対症・電気・熱気・箱庭・物理・免疫・理学など  
多岐) “ “ 人名に “ 弘法大師 “ “ 法然 (ホウネン・浄  
土宗の開祖) “ “ 一寸法師 “ “ フラン (フランスの  
貨幣の単位) “ “ など。

### 平成26年度 第7回 (第83回) 報告

- 1 日時 平成26年10月18日 (土) 18時30分～20時30分
- 2 場所 ヒューマンプラザ7階 第2会議室
- 3 出席者 (省略)
- 4 周知事項  
・ 学習会予定 11月は休み。12月20日 (土)  
17時より。19時から忘年会。

・合同新年会 1月25日(日)

13時より。桜木町ワシントンホテル

## 5 学習会内容

使用教材 漢点字 講習用 テキスト

初級編第6回

## 8 複合文字(4)

2. 紹介し落した文字および基本文字にない

象形文字・会意文字二十二字

## ア 前回の復習

(35) 「求<sup>⋮</sup>」 十<sup>(⋮)</sup> 2・4・5の点)と水

(⋮) 1・2・3の点)で表す。字式は省略。動物の皮の形を象つたもの。カワには「皮」(皮を剥いだ形)と「革」(剥いだ皮を伸ばしたもの)がある。

(36) 「去<sup>⋮</sup>」 土<sup>(⋮)</sup> 1・3・4・5の点)

とコ<sup>(⋮)</sup> 2・4・6の点)で表す。字式は土・ム。

ムは口の上の部分欠けたもの。

(37) 「法<sup>⋮</sup>」 さんずい<sup>(⋮)</sup> 1・2・3の

点)と去<sup>(⋮)</sup> 2・4・6の点)で表す。

## イ 今回の学習

(38) 「勤<sup>⋮</sup>」 力<sup>(⋮)</sup> 1・3・4の点)とき

(⋮) 1・2・6の点)で表す。力は農具のすき

(来) からきたもの(白川説)。音読みのキンは漢音、ゴンは呉音。テキスト以外の熟語は

「勤求(ゴング・勤めて仏の教えを求めること)

「勤め口」 「出勤」 「日勤」 「夜勤」 「常勤」 「勤

勉」 「忠勤」 「在宅勤務」 「勤皇」 「参勤交代」 など。

(39) 「兼<sup>⋮</sup>」 リ<sup>(⋮)</sup> 1・2・5の点)とケ

(⋮) 1・2・4・6の点)で表す。音読みのケンは

漢・呉音。テキスト以外の熟語は「兼愛(平等に人を

愛すること)」「兼備」「兼任」「昼夜兼行」「待ち

兼ねる」「見兼ねる」「据え兼ねる」「耐え兼ねる」

「堪り兼ねる」、地名に「兼六園」、人名に「吉田兼

好」「直江兼統(くかねつぐ)」など。

\* 兼を含む文字に「嫌」「謙」「鎌」など

がある。

(40) 「困<sup>⋮</sup>」 国構え<sup>(⋮)</sup> 2・3・5・6の

点)と木<sup>(⋮)</sup> 1・2・6)で表す。音読みのコンは

漢・呉音。テキスト以外の熟語は「倦困(けんこん

あきて苦しむこと)」「困憊(こんばい)」「困りに

続く言葉に(者、入る、切る、抜く、果てる、な

ど)」「

平成26年度 第8回 (第84回) 報告

1 日時 平成26年12月20日 (土)

17時00分～18時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第2会議室

3 出席者 (省略)

4 周知事項

・学習会予定 1月17日 (土)、2月21日 (土)

いずれも第2会議室

5 学習会内容

使用教材 漢点字 講習用 テキスト

初級編第6回

8 複合文字 (4)

2. 紹介し落した文字および基本文字にない

象形文字・会意文字二十二字

ア 前回の復習

(38) 「勤」 力 (1・3・4の点) とキ

(1・2・6の点) で表す。左側にキンの音の形、右側に「力」。雨乞いの様子を表わす形。雨乞いをして雨が降らない場合、神に祈りを捧げた巫女を生贄にした。訓の「つとめる」と読む字に「務め

る」「努める」「勉める」がある。

(39) 「兼」 リ (1・2・5の点) とケ (1・2・4・6の点) で表す。象形文字。

「兼」を含む文字は「謙」「嫌」「慊」「兼」がある。

(40) 「困」 国構え (2・3・5・6の点) と木 (1・2・6の点) で表す。字式は口

(国構え) √木。門の扉に付ける櫛(しきみ)。

イ 今回の学習

(41) 「妻」 女 (1・3・4・6の点)

とサ (1・5・6の点) で表す。象形文字。女性の髪飾りを象った形。音読みのサイは呉音。訓読みに

「め」がある。テキスト以外の熟語には「花妻(はなづま)・花のように美しい妻。萩の異称)」「糟糠の妻

(貧乏な時から苦労を共にしてきた妻)」「恐妻」「滑り妻(ぬめりつま・浮気な妻)」「後妻(ごさい)。

うわなり)」「老妻(ろうさい。おいめ)」「恐妻」「隠し妻」「一妻多夫」「妻板(つまたい・側面の板)」、地名に「妻籠(つまご・中山道の宿場町)」「俳優に「阪妻(ばんつま・坂東妻三郎の略)」などがある。

ある。

出師表 (五)

陛<sub>上</sub>之<sub>下</sub>漢<sub>一</sub>驚<sub>二</sub>三<sub>一</sub>定<sub>マ</sub>深<sub>ク</sub>帝<sub>三</sub>恐<sub>ル</sub>受<sub>ケ</sub>臨<sub>ミ</sub>  
 下<sub>上</sub>所<sub>下</sub>室<sub>ヲ</sub>鈍<sub>ヲ</sub>軍<sub>ヲ</sub>兵<sub>二</sub>入<sub>ル</sub>之<sub>一</sub>付<sub>レ</sub>命<sub>ヲ</sub>崩<sub>ゼ</sub>先<sub>帝</sub>  
 之<sub>の</sub>以<sub>テ</sub>還<sub>ラン</sub>攘<sub>ニ</sub>北<sub>ノ</sub>甲<sub>カタ</sub>不<sub>一</sub>明<sub>ヲ</sub>託<sub>シ</sub>以<sub>テ</sub>寄<sub>ス</sub>帝<sub>ハ</sub>  
 職<sub>ニ</sub>報<sub>イ</sub>於<sub>テ</sub>除<sub>シ</sub>中<sub>ム</sub>已<sub>ニ</sub>毛<sub>一</sub>故<sub>ニ</sub>不<sub>シ</sub>來<sub>カ</sub>臣<sub>ニ</sub>知<sub>リ</sub>  
 分<sub>ナ</sub>先<sub>ナ</sub>旧<sub>ニ</sub>姦<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>足<sub>ル</sub>今<sub>ニ</sub>五<sub>ニ</sub>月<sub>ニ</sub>効<sub>アラ</sub>夙<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>臣<sub>ノ</sub>  
 也<sub>一</sub>帝<sub>ニ</sub>都<sub>ニ</sub>凶<sub>ヲ</sub>原<sub>上</sub>當<sub>ニ</sub>南<sub>ニ</sub>月<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>夜<sub>ニ</sub>大<sub>ニ</sub>謹<sub>ニ</sub>  
 而<sub>レ</sub>此<sub>レ</sub>興<sub>ニ</sub>庶<sub>ハ</sub>獎<sub>ニ</sub>方<sub>ニ</sub>渡<sub>リ</sub>傷<sub>ナ</sub>憂<sub>ニ</sub>事<sub>ヲ</sub>慎<sub>ナル</sub>  
 忠<sub>中</sub>臣<sub>ニ</sub>復<sub>シ</sub>竭<sub>ク</sub>率<sub>シ</sub>已<sub>ニ</sub>瀘<sub>ヲ</sub>先<sub>ニ</sub>歎<sub>シ</sub>也<sub>一</sub>故<sub>ニ</sub>

先帝は臣の謹慎なるを知り、故に崩ぜらるるに臨み、臣に寄するに大事を以てせり。命を受けしより以來、夙夜に憂歎し、付託の効あらずして、以て先帝の明を傷なわんことを恐る。

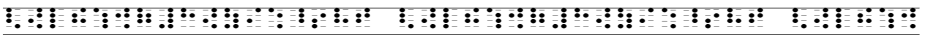
故に五月、瀘を渡り、深く不毛に入る。今、南方已に定まり、兵甲已に足る。当に三軍を獎率して、北のかた中原を定むべし。

庶わくは驚鈍を竭くし、姦凶を攘除し、漢室を興復して旧都に還らん。此れ臣の先帝に報いて陛下に忠なる所以の職分なり。

先帝より託された大事の実現に日夜心を砕いてきたが、南方の地を征することにより、軍備は整った。今こそ中原の地を平定すべき時である。魏を倒して漢室再興の悲願を達成し、先帝の恩義にむくい、現皇帝に忠誠を尽したいと、熱く訴える。

〔参照図書〕渡辺精一（祥伝社新書）『朗読してみたい 中国古典の名文』





先 帝 ハ 知 リ 臣 ノ 謹 慎 ナル  
 ヲ、 故 ニ 臨 ミ 崩 ゼラルルニ、 寄 ス  
 ルニ 臣 ニ 以 テセリ 大 事 ヲ 也。  
 受 ケシヨリ 命 ヲ 以 来、 夙 夜 ニ 憂 歎  
 シ、 恐 ル 付 託 ノ 不 シテ 効 ア  
 ラ、 以 テ 傷 ナハンコトヲ 先 帝 之 明  
 ヲ。 故 ニ 五 月 渡 リ 瀘 ヲ、 深  
 ク 入 ル 不 毛 ニ。 今 南 方 已 ニ  
 定 マリ、 兵 甲 已 ニ 足 ル。 ベシ  
 当 ニ 獎 率 シテ 二 軍 ヲ、 北 ノ 力  
 タ 定 ム 中 原 ヲ。 庶 ハクハ 竭  
 クシ 驚 鈍 ヲ、 攘 除 シ 姦  
 凶 ヲ、 興 復 シテ  
 漢 室 ヲ、 還  
 ラン 於 旧 都 ニ。  
 此 レ 臣 之 所 以  
 報 イテ 先 帝 ニ、  
 而 忠 ナル 陛 下  
 ニ 之 職 分 ナリ 也。



清の時代に描かれた諸葛亮 (孔明) と司馬懿(仲達)の図

## 「報告と」案内

一 本誌『うか』は、今号で一〇一号を  
迎えました。

横浜漢点字羽化の会は、活動を開始してから十九年を終え、二十年目に入ろうとしております。東京漢点字羽化の会も、十年目に入っております。

本誌は一九九七年四月に創刊して、昨年・二〇一四年十月に一〇〇号を迎えました。そして今号は、一〇一号となりました。「思えば遠くへ来たものだ」、という気分はない訳ではございませんが、一歩一歩歩を進めることだけを考えて今日まで参りました。今後も同様に続けて参る所存でございます。

今号から、東京で行っております学習会のご報告を、再会致します。

皆様のご愛読に感謝申し上げますと共に、相変わりがませぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

## 二 『萬葉集釋注』第三卷、完成間近

一昨年から横浜市中央図書館に納入を始めました、

伊藤博著『萬葉集釋注』（集英社文庫）の、今年度の納入分である第三卷（巻五・巻六）の漢点字版の製作作業が、いよいよ最終段階に入っております。

この巻の中心人物は、山上憶良です。「貧窮問答歌」や「嘉摩三部作」など、わが国で最も古い資料でありながら、現代的課題である人間社会の不平等と不条理、そして苛斂誅求の実態と社会の矛盾を歌い、また人間として生まれて避けられない愛と情の苦しみ、病と老いの苦しみを歌にまとめられます。千数百年の時間の隔たりが感じられません。これこそ古典の醍醐味なのでしょう。

漢点字使用者の皆様、ぜひご一読下さい。

## 三 ご質問に

現在『常用字解』の音訳に取り組んでおります。これに関してご質問をいただきました。

ご質問…なぜ『常用字解』なのでしょう？決して一般的な書物ではありませんし、しかも漢和辞典です。視覚障害者の皆様には、もっと別の書物が優先されるのではないのでしょうか？

このご質問に岡田は、「『常用字解』は漢和辞典と捉えるより、読み物と捉えることで、ニーズに応えられると捉えて取り組んでいる」と、お答え致しました。この答えが外れているというのではございませんが、この書物を選択するに当たって、もう一つ大きな理由がございますことを申し上げます。

一般には、視覚障害者が読書を希望する際、図書館など視覚障害者の利用を念頭に置いた施設を訪れば、何でも読めると理解されている向きがあるようです。しかしそれは全くの誤解で、そのような施設の蔵書たるや極めて貧弱なのが実態です。従って読書を希望しても、ほんの短い間に、読む本はなくなってしまう。そうしますとニーズを持つ視覚障害者は、そのニーズを諦めるか、自ら点訳者や音訳者を探して、点訳あるいは音訳をお願いするしかありません。

今回の『常用字解』についても、その意味で岡田のニーズを延長したものと言えます。しかし岡田のニーズとは申しても、そこには多くの中途失明者や漢字を手にしていないことで苦しんでいる視覚障害者がいま

す。音訳版の『常用字解』が完成した暁に、彼らにどのように迎えられるかは想像の外ではありませんが、少なくともこのような書物が音訳されるということは、このように発起する者と、賛同して下さる音訳者や支援者がおられない限り、叶わないことです。放っておいては、いつまで待っても作られません。そういう意味で今回のプロジェクトは、あり得ない本ができるということですし、これまでの視覚障害者には閉ざされている窓が、大きく開かれることになるかと捉えてよいと考えます。

窓と言えば作家の宮城谷昌光氏は、「文字は歴史に開かれた窓」だとおっしゃっておられます。してみるとこれまで、視覚障害者には歴史の窓は閉ざされたままだったということになります。窓が開かれて、その向こうに何を見るか、視覚障害者は目が見えないなどと言わないで下さい、心にはちゃんと目を持っております。その目で何を見るか、このことが大事なことです。

以上が音訳版『常用字解』製作に当たって発起したものです。

読者諸兄姉のご意見を賜れば幸甚に存じます。

## 編集後記

▼当会が発足して来年で満20年、その間に世の中のIT環境がすっかり様変わりしてしまいました。パソコン本体の発展は目を見張るもので、この20年足らずの間にとんでもない能力を備えるまでに進化してしまいました。初めて40メガバイトのハードディスクを手にしたとき、フロッピーディスクに比べて何と速く確実に動いてくれるのかと感心したのですが、今や32ギガバイトのマイクロSDカードは、小指の爪ほどの大きさしかありません▼こんな最先端の技術を一杯に詰め込んだのが、スマホと呼ばれる手のひらサイズのコンピュータでしょう。最近私は通信会社から熱心に勧められて、 아이폰6 という最新型のスマホを手に入れました▼いくらパソコンに慣れているといつても、スマホの使い勝手は全く別物です。ほとんどすべての操作が、画面に現れる画像相手のタッチ操作で、とにかく操作してみても反応を確かめ、何度かやっているとうちにだんだん思うような目的が達せられるというもののようです。こういう具合では、視覚障害の方にとっては、どうにも利用のできない代物でしょう。ますます便利になって行く世の中が、一部の人のにとつては非常に不自由なものになるという事実は、困ったもののだといわざるを得ません。

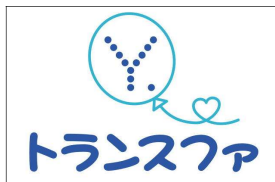
(木下 和久)

## (有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。



〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : okada\_tr\_eib@ybb.ne.jp

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は4月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。